



令和7年度第1回検討会での指摘事項への対応

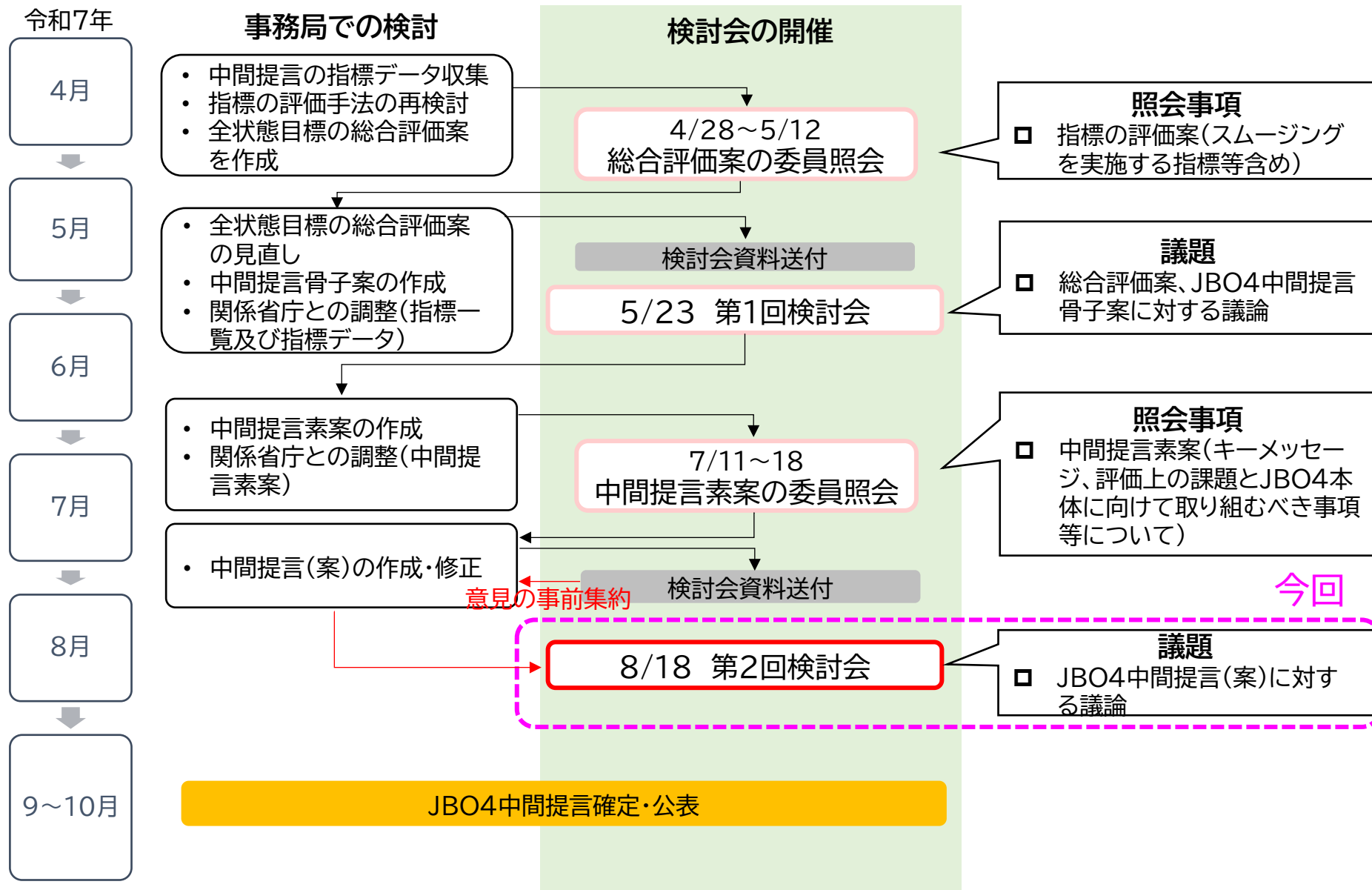


令和7年8月18日

環境省自然環境局自然環境計画課



令和7年度第1回検討会～本検討会までの流れ



令和7年度第1回検討会での指摘事項への対応（1）

No.	資料※	基本戦略	状態目標	指摘事項	対応
1	2-1	2	2-3	状態目標2-3 健康へのリスク 感染症の小区分については、グラフの増減傾向とその状態が好ましいかどうかが一致していない。状態が好ましいほうを上向きにすべきではないか。統一感を持たせた方がよい。（足立委員）	大区分の文言が「～のリスク」など、目標要素と整合していないものについては、「～のリスクの軽減」などとして大区分の文言を修正した。（資料2-1,2-2）
2	2-1	-	-	-増加と減少自体は評価を含んでいない言葉である。どの個別の指標についても進展と後退など方向性がわかる記載方法にするべきではないか。本来はどの個別の指標についても増加が改善となるとよいが、それは難しいと考える。（角谷委員）	減少が良いとされる指標については、増加・維持・減少の3つを用いることで統一することとした。（資料2-1）
3	2-1	-	-	-今回は個別のデータの信頼度が低いわけではなく、全体としてデータの傾向にばらつきがあることを意味している。読み手はあまり細かい説明は読まないと考えるため、意図がきちんと伝わるように、データの傾向にばらつきがあることが伝わる文言に変えた方がよいのではないか。（橋本委員）	JBO4の信頼性評価のイメージの縦軸を「評価への同意性」から「指標群の傾向の一致性」に変更した。（資料2-1）
4	2-1	-	-	-Degree of Agreement を「同意性」と翻訳しているが、データの「一貫性」として客観的にしておいた方がよいのではないか。（齊藤委員）	
5	2-1	-	-	-P.4の信頼度が高い場合の「大きな進展なし」は維持傾向が多い場合だが、P.5の信頼度が低い場合の「大きな進展なし」は増加と減少がばらついて場合を示しており、大きな進展なしでも全く違うものを意味していると考え。A指標以外でばらつきが多い場合は、「指標の傾向が不明」に近いのではないかと。表現の仕方を変えた方がよい。（山北委員）	傾向にばらつきがある場合を「不明」にすると、信頼性が低い「大きな進展なし」がなくなり「不明」が多くなることから、変更はしないこととした。（資料2-1）
6	2-1	-	-	-P.4、5での指標が単体であるときの扱いを整理する必要がある。（山野委員）	ご指摘を踏まえ、指標が単体の場合は信頼性は低いとした。（検討会中に修正済み）（資料2-1） 参考①参照
7	2-1	-	-	-中間提言では考慮しないと思うが、統合指標であり、統計的な有意性が示された指標は単体でも信頼度が高いとしてよいのではないかと。（角谷委員）	統合指標のように、単体であっても統計的な有意性が示されている場合は、信頼性は高い評価とする。（資料2-1） 参考①参照
8	2-1	-	-	-評価が不明となるところにも、信頼度があつてよいのではないかと。（山野委員）	評価が「不明」に対する信頼性は設けず、「不明」の理由としている「指標の傾向が不明」については、単年のデータであるためか、2時点以上があるが傾向の判断ができないのか等の理由も追記した。（資料2-2）
9	2-1	-	-	-指標の選定基準に継続性が含まれるが、今回行っている評価は過去からのトレンドを見ており、継続性がなくても評価に使える可能性もある。B指標の中でも質の違いがあるのではないかと。（山野委員）	B指標となった理由の違いについては、付属書において指標毎に記載している「指標ランクの判断理由」で対応している。（資料2-2）
10	2-2	-	-	-資料2-2（スムージングにかかる資料）にかかる各指標の傾向判断について	前回検討会での議論を踏まえて、各指標の傾向を判断した。（資料2-1,2-2）

令和7年度第1回検討会での指摘事項への対応（2）

No.	資料※	基本戦略	状態目標	指摘事項	対応
11	2-3	-	-	-各状態目標の総合評価は大区分・小区分の各指標の評価とどう対応しているのか。また、ここには使われた指標数が記載されているが、矢印の向きの整理にした方が分かりやすいのではないか。（角谷委員）	状態目標毎の評価は、その前段階の小区分、そして大区分の評価結果を統合していく形で判断している。（当日回答済み）
12	2-3	-	-	-使われた指標については、個数のあとに括弧書きでパーセントという示し方がよい。また、進展、後退、維持の内訳もテーブルで示されていると傾向が分かりやすい。（齊藤委員）	ご指摘を踏まえ、付属書において基本戦略・状態目標・指標ランク別の指標数と割合を表で示した。なお、本中間提言では個別の指標データの傾向は評価しないこととしているため、傾向毎の内訳は示していない。（資料2-2）
13	2-3	-	-	-最終的に表に出るものの中で状態目標の総合評価と大区分・小区分の評価結果がどう対応しているかが見やすくなるよう工夫できればよい。状態目標毎の集計ではなく、指標区分毎に集計すればよいのではないかと。（角谷委員）	中間提言本文には指標区分毎の評価結果を示し、状態目標毎の指標の集計は付属書に記載した。（資料2-2）
14	2-3	1	1-1	二次林は常緑樹林化が進んでいくことが問題となっていることがある。参考資料3では判読精度に変更があったため二次林が結果的に増えたという記載もあったが、それは実質的なものではなく、評価方法が適切かは疑問である。（深町委員）	集計方法が変わった指標である森林生態系面積はB指標であり、評価の判断には用いていない。（当日回答済み）（資料2-2）
15	2-3	1	1-1	森林面積が増えることは良い面がある一方、生物多様性の観点では問題があるという考え方もある。森林の面積が増えることは、草地など他の土地利用の面積が減ることにもなる。面積が増えたことを良い評価とするのではなく、その質や何が減ったことで増えたのかも少し丁寧に見る必要がある。（深町委員）	ご指摘を踏まえ、人工林や農地等の人間が管理する生態系については「面積・量」のみで健全性の回復を評価できないため、妥当性の観点で、一部の指標をC指標に格下げした。（資料2-2）
16	2-3	1	1-1	人工林が増えると、農地や湿地など他の土地利用が減少していることでもあるので、増えたことを一律に考えることには疑問がある。質を見るデータがないのは仕方ないが、生物多様性の観点ではよい状態になっているわけではないというのが実感である。（深町委員）	参考②参照
17	2-3	1	1-1	人工林は本来であれば伐採をして回転させていくことが生物多様性上も重要だが、経済的に見合わないためそのままとなり、蓄積だけが aumentando している状況がある。今回の評価に蓄積が効いてプラスの評価になっているのであれば、そこは問題だと考える。（深町委員）	
18	2-3	1	1-1	湖沼について改善傾向と判断するのは難しいのではないかと。琵琶湖等の結果は良くなっている印象はない。（深町委員）	湖沼について、中間提言時点では生息環境の指標のみとなるが、富栄養化の状態の評価も重要であるため、水質が良くなっている点は評価する。（資料2-1,2-2）
19	2-3	1	1-1	在来種の喪失など、生き物の状態から見ると深刻な状況であるため、そのような部分も組み込む必要があると感じる。（深町委員）	

令和7年度第1回検討会での指摘事項への対応（3）

No.	資料※	基本戦略	状態目標	指摘事項	対応
20	2-3	1	1-1	〔樹木の地上部現存量〕二次林は里山の重要な構成要素ではあるが、現存量が増えると改善につながるとすることは不適切である。面積・量には現存量または面積の指標が入っているが、生息環境の指標としてみると現存量の増加はマイナスに働くため、二次林については同じ指標を生息環境にも入れてマイナスか現状維持の判断を入れるべきではないか。（角谷委員）	あくまで二次林の評価であり、地上部現存量の増減から質の変化は直接的には読み取れないため、生息環境に指標としては入れないこととした。（資料2-2）
21	2-3	1	1-1	P.3で面積・量、生物種数・多様性、種の個体数・分布域、生息環境の指標がすべてそろっている生態系全体としての評価は下向きだが、状態目標1-1の総合評価は横向きとなっているのはおかしいのではないか。（山野委員）	大区分「生態系全体」を「陸域生態系」とした上で、大区分を個別生態系（森林、農地、都市、陸水域、サンゴ礁、藻場、干潟・砂浜）と個別生態系以外（陸域生態系、沿岸・海洋生態系、生態系ネットワーク）で再整理した。（資料2-1,2-2） 参考③参照
22	2-3	1	1-1	〔「生きている動物」等の海外からの輸入数・「生きている動物」の海外からの輸出数・「生きている動物」の海外への輸出数〕動物等の輸出入の指標が基本戦略1の指標になっている理由を説明してほしい。基本戦略4の消費のところに移動すべきではないか。分類群などであればある程度特定できると考える。（久保委員）	状態目標1-1に指標としては残しつつ、状態目標4-2の負荷削減にC指標として再掲することとした。（資料2-2）
23	2-3	-	-	指標の移動や指標ランクの変更は総合評価の結果に影響すると考えるが、センシティビティについては今後議論や文章化はされるか。（久保委員）	指標についてはこれまでの検討会及び委員照会結果を踏まえて設定しており、基本的にはこちらをベースに考えていきたい。今回の検討会を踏まえて移動させるべき指標があれば、個別のご意見をいただき、それをもとに検討したい。（当日回答済み）
24	2-3	1	1-1	森林、農地等の中に小区分として「全体」があるが、その指標として例えばナラ枯れや松くい虫は二次林に特徴付けられるものであり、全体の指標といえるのか。全体の指標と下位区分で起きている現象を関連付けて議論する必要がある。（大橋委員）	ナラ枯れ、松くい虫に関しては、二次林や人工林以外での被害量も含まれていることを加味し、森林全体の指標として入れた経緯がある。（資料2-2）
25	2-3	1	1-2	分類群や生態系タイプで分けなくてよい。ここは種レベルの絶滅リスクで、状態目標1は全国的な健全性を見ているが、重要な地域個体群に係る指標がどこにも入っていない。全国平均すると消えてしまう地域毎の変化も拾う必要がある。（山北委員）	生態系タイプで分けることについては、基本戦略1状態目標1でカバーしていると考え。分類群や地域個体群で分けると非常に細くなり、全国の総合評価を行うというJBOの目的から離れるため、それらに係る評価の扱いについては本体で改めて検討する。（資料2-1）
26	2-3	1	1-2	〔レッドリストインデックス〕A指標のレッドリストインデックスは統合的指標であるため、信頼性は高い指標と考える。信頼性についてはその点も含めて検討いただきたい。（角谷委員）	検討会中に状態目標1-2の種の小区分の評価の信頼性を破線（信頼性低い）に変更したが、本指摘を踏まえて実線（信頼性高い）に戻した。全体方針はNo.7と同様。（資料2-1）

令和7年度第1回検討会での指摘事項への対応（４）

No.	資料※	基本戦略	状態目標	指摘事項	対応
27	2-3	2	2-1	資料3のP.12では、生態系サービスがNbS(自然を活用した社会課題の解決)の中に入っているが、現在の指標はあくまで生態系サービスであって、NbSとは限らないのではないかと。NbSとして切り出すのであれば、調整サービスの中で人間が意図的に使用しているものに限定すべき。(足立委員)	資料3のP12の記載をあくまで国家戦略に掲げる基本戦略の評価だということが分かるように修正した。 例) 自然を活用した社会課題の解決(NbS)に係る進展と課題 ↓ 「基本戦略2 自然を活用した社会課題の解決」に係る進展と課題 ※ほかの基本戦略も同様 (資料2-2)
28	2-3	2	2-1	[生漆の生産量]小区分「伝統芸能・伝統工芸」で生漆の生産量をA指標としているが、伝統工芸を判断する指標としては疑問がある。例えば、森林資源やヨシを使うことで成り立っている伝統文化は生物と密接に結びついていたり、マツ枯れにより減少しているアカマツも火祭りや陶芸などの伝統文化に直結している。それらの蓄積量や資源量等を指標として見ていく方がよいのではないかと。(深町委員)	ヨシ(よしず、茅葺きなど)、アカマツ(陶芸用、建材など)の全国的な生産量は現状把握が難しい。また、ヨシやアカマツの生産が「伝統芸能・伝統工芸」に直結するわけではないため、中間提言時点では指標としては追加しないこととした。
29	2-3	2	2-1	[生漆の生産量]生漆については絶対量よりも自給率を見るべきではないかと。その他、稲わらや竹、笹等が地域で取れなくなっているということもあるので、伝統文化を維持するという意味では分かりやすいのではないかと。(足立委員)	生漆の生産量については、「伝統芸能・伝統工芸」に直結するとは言えないため、C指標にランクダウンした。また、ここでは文化的サービスに関連した供給量を見ているため、自給率は含めないこととした。(資料2-2)
30	2-3	3	3-1	既存の調査ではこの目標を評価することが難しいため、別途調査をしてJBOに活かすべきである。(足立委員)	ご指摘の内容は、JBO4策定に向けた課題として中間提言の第2章に記載した。(資料2-1)
31	2-3	4	4-1	[自然に期待する働きの選択割合]P.137の「自然に期待する働きの選択割合」を減少傾向と判断するのは疑問。有意差検定など統計的な判断も必要ではないかと。(齊藤委員)	ご指摘を踏まえ、各年の結果を再確認し、共通する選択肢の内容で比較ができるよう、結果の示し方を見直した。(資料2-2)
32	2-3	4	4-1	[自然に期待する働きの選択割合]折れ線で示すと分かりやすいかもしれない。(橋本委員)	
33	2-3	5	5-2	[生物多様性および生態系の保全と持続可能な利用に関する国内外の公的資金・生物多様性および生態系の保全と持続可能な利用に関する国内の公的資金]P.149について、評価結果は上向きだが、指標のグラフからは増加傾向が読み取れない。(山北委員)	スミージング対応を実施した上で、「生物多様性および生態系の保全と持続可能な利用に関する国内外の公的資金」は維持傾向、「生物多様性および生態系の保全と持続可能な利用に関する国内の公的資金」は増加傾向の判断とした。(資料2-2)

参考④参照

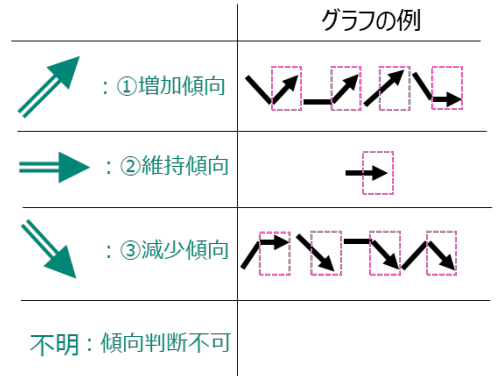
令和7年度第1回検討会での指摘事項への対応（5）

No.	資料※	基本戦略	状態目標	指摘事項	対応
34	3	-	-	-中間提言を謳っているのに対して、骨子(案)の中で中間提言に相当する箇所がどこか分らなかった。国家戦略の更なる推進のための提言が必要ではないか。国家戦略の省庁連絡会議等も関連してくるのではないか。(橋本委員)	中間提言の構成を見直し、初めにキーメッセージとして提言部分をまとめ、その背景情報である評価結果をその後に示すこととした。(資料2-1)
35	3	-	-	-構成として、キーメッセージがメインの提言部分で、その背景として評価があるべきではないか。現状ではポイントがどこにあるのかが分かりづらい。最終的な分量や要約版の作成予定も踏まえ、順序については検討が必要である。(橋本委員)	
36	3	-	-	-データギャップについては粒度を上げ、具体的に何が足りないのか、どのような観測やモニタリングが必要かを、例えば状態目標毎に特定していく文章があるとよい。状態目標の評価の後にそれぞれのデータギャップを示すことも一案と考える。(角谷委員)	ご指摘の内容は、JBO4策定に向けた課題として中間提言の第2章第3節に記載した。(資料2-1)
37	3	-	-	-第1章において、総合評価ができない状態目標については、無理に代表的な図表を入れるのではなく、データが足りない点を強調すべきではないか。(齊藤委員)	ご指摘を踏まえ、総合評価ができない状態目標については、無理に代表的な図表を入れず、データが足りない点を強調した。(資料2-1)
38	3	-	-	-指標の傾向の結果の判断を入れないのであれば、指標一覧においてその値が上がるとポジティブなのかネガティブなのかを分かりやすく示した方がよい。(角谷委員)	中間提言本文及び付属書において指標データ自体の変化について言及する際は「増加・維持・減少」を用い、状態目標の要素に対する変化について言及する際は「改善・維持・後退」を用いることで統一した。(資料2-1)
39	3	-	-	-評価のスコープを記載するところに、例えば森林生態系はモニタリングサイト1000での限定的な範囲で見ていることや、状態目標2-1のNbSの基盤として生態系サービスを評価していることなど、国家戦略と評価したいものとのつながりの説明は必要である。(角谷委員)	指標に関する留意事項は付属書に、評価の枠組みに関する補足事項は中間提言本文に記載した。(資料2-1)
40	3	-	-	-P.3の図3が何を示しているかわからない。(久保委員)	ご指摘を踏まえ、図を修正更新した。(資料2-1)
41	3	-	-	-状態目標の下に各政策がぶら下がっているわけであり、レバレッジポイントのテコは間接要因だけではなく、直接要因を含めたすべてに対応するものとすべき。テコはなくし、どの戦略が間接要因や直接要因に対応しているのかを示せばよい。(橋本委員)	
42	3	-	-	-各状態目標でどのようなA指標が評価に使われたかを示す予定はあるか。(吉田座長)	指標ランク別の指標一覧は付属書に示す。(資料2-2)

(参考①) 各凡例におけるA指標群の傾向の特徴の基本的考え方

		凡例					
		目標達成に向けて順調 (信頼性高)	進展したが、その程度は不十分 (信頼性高)	大きな進展なし (信頼性高)	後退したが、その程度は限定的 (信頼性高)	目標から大きく後退した (信頼性高)	不明
							—
特徴	指標が複数	①（増加）が2/3程度以上で、③（減少）が含まれない。 増加に強く偏った構成。	①（増加）が1/2～2/3程度未満、③（減少）は含まれない。 増加と維持がバランスよく含まれた構成。	②（維持）が1/2程度以上で、①（増加）と③（減少）の相反する傾向が両立することがない。 維持に強く偏った構成。	③（減少）が1/2～2/3程度未満、①（増加）は含まれない。 減少と維持がバランスよく含まれた構成。	③（減少）が2/3程度以上で、①（増加）が含まれない。 減少に強く偏った構成。	指標の傾向が不明
	指標が単体 ※統合的な指標の場合のみ	①（増加）であり、2020年頃以降の時点データが2点以上ある	①（増加）であり、2020年頃以降の時点データが1点のみ	②（維持）の場合	③（減少）であり、2020年頃以降の時点データが1点のみ	③（減少）であり、2020年頃以降の時点データが2点以上ある	
組合わせ例 ※（①,②,③）の指標数を表す		(2,0,0), (3,0,0), (2,1,0), (4,0,0), (3,1,0), (5,0,0), (4,1,0), (6,0,0), (5,1,0), (4,2,0)	(1,1,0), (2,2,0), (3,2,0), (3,3,0)	(0,2,0), (0,3,0), (1,2,0), (0,2,1), (0,4,0), (1,3,0), (0,3,1), (0,5,0), (1,4,0), (0,4,1), (2,3,0), (0,3,2), (0,6,0), (1,5,0), (0,5,1), (2,4,0), (0,4,2)	(0,1,1), (0,2,2), (0,2,3), (0,3,3)	(0,0,2), (0,0,3), (0,1,2), (0,0,4), (0,1,3), (0,1,4), (0,0,5), (0,0,6), (0,1,5), (0,2,4)	

【各指標の傾向の類別】

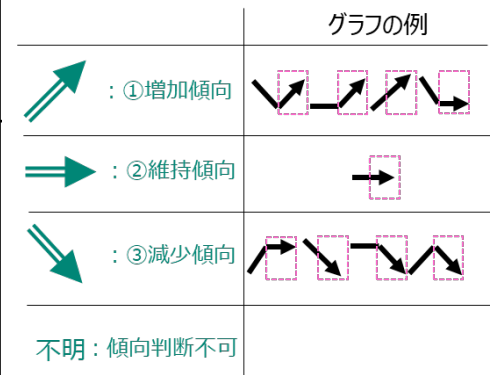


※  は2020年頃以降の期間を示す。

(参考①) 各凡例におけるA指標群の傾向の特徴の基本的考え方

		凡例					
		目標達成に向けて順調 (信頼性低)	進展したが、その程度は不十分 (信頼性低)	大きな進展なし (信頼性低)	後退したが、その程度は限定的 (信頼性低)	目標から大きく後退した (信頼性低)	不明
							—
特徴	指標が複数	①（増加）が2/3程度以上で、③（減少）が含まれる。増加と減少が混在しながら増加が優勢な構成。	①（増加）が1/2～2/3程度未満で、③（減少）が含まれる。増加と減少が混在しながら増加がやや優勢な構成。	②（維持）が1/2程度以上で、①（増加）と③（減少）の相反する傾向が両立。もしくは、①（増加）と③（減少）が同程度両立。増加と減少が混在しながら維持に偏った構成。	③（減少）が1/2～2/3程度未満で、①（増加）が含まれる。増加と減少が混在しながら減少がやや優勢な構成。	③（減少）が2/3程度以上で、①（増加）が含まれる。増加と減少が混在しながら減少が優勢な構成。	指標の傾向が不明
	指標が単体	①（増加）であり、2020年頃以降の時点データが2点以上ある	①（増加）であり、2020年頃以降の時点データが1点のみ	②（維持）の場合	③（減少）であり、2020年頃以降の時点データが1点のみ	③（減少）であり、2020年頃以降の時点データが2点以上ある	
組み合わせ例 ※（①,②,③）の指標数を表す		(2,0,1), (3,0,1), (4,0,1), (5,0,1), (4,0,2) (1,0,0), ※2020年頃以降の時点データが2点以上ある場合	(2,1,1), (3,1,1), (2,2,1), (4,1,1), (3,2,1), (3,1,2) (1,0,0) ※2020年頃以降の時点データが1点のみの場合	(1,0,1), (1,1,1), (2,0,2), (1,2,1), (3,0,2), (2,1,2), (2,0,3), (1,3,1), (1,4,1), (3,0,3), (1,3,2), (2,3,1), (0,1,0)	(1,1,2), (1,1,3), (1,1,4), (1,2,2), (1,2,3), (2,1,3) (0,0,1) ※2020年頃以降の時点データが1点のみの場合	(1,0,2), (1,0,3), (1,0,4), (1,0,5), (2,0,4) (0,0,1) ※2020年頃以降の時点データが2点以上ある場合	

【各指標の傾向の類別】



※  は2020年頃以降の期間を示す。

(参考②) 基本戦略1－状態目標1の指標ランク変更

状態目標1 全体として生態系の規模が増加し、質が向上することで健全性が回復している

国家戦略の目標要素	指標区分			A指標	B指標	C指標
	大区分	小区分	細区分			
全体として生態系の規模が増加し質が向上することで健全性が回復している	森林	全体	面積・量	森林面積 林地からの都市的土地利用への転換面積(目的別用途) 森林蓄積	ニホンジカによる森林生態系への影響度の変化 森林生態系面積 シカの増加と樹木の新規加入率の関係	松くい虫被害量 ナラ枯れ被害量 森林蓄積
			生物種数・多様性		森林の多様度(モニタリングサイト1000の林分パラメーター(個体数、種の豊富さ、多様度指数、地上部現存量)) 森林の多様度(鳥類の種数)	人工林の蓄積の影響が大きい ためC指標にランクダウン
			種の個体数・分布域	ニホンジカの推定個体数 ニホンジカの推定生息密度及び分布状況	ヒグマ・ツキノワグマの分布変化 森林の多様度(鳥類のバイオマス)	
			生息環境			イノシシの推定個体数 シカの分布とウグイスの個体数 ガビチョウの分布と積雪深の関係
		自然草原	面積・量	森林の多様度(自然草原における維管束植物の植被率)	森林生態系面積(自然草原の面積)	
			生物種数・多様性	森林の多様度(自然草原における維管束植物の種数)		
			種の個体数・分布域			
			生息環境	高山帯における土壌の凍結終日の変化	高山植物の開花開始日 ハイマツの年枝伸長量	
		自然林	面積・量	樹木の地上部現存量(自然林)	森林生態系面積(自然林の面積)	
			生物種数・多様性			
			種の個体数・分布域	亜寒帯/亜高山帯～冷温帯の境界付近、及び冷温帯と暖温帯の境界付近におけるタイプ別の樹木個体数の変化		
			生息環境			

国家戦略の目標要素	指標区分			A指標	B指標	C指標
	大区分	小区分	細区分			
全体として生態系の規模が増加し質が向上することで健全性が回復している	森林	二次林	面積・量	樹木の地上部現存量(二次林)	森林生態系面積(二次林の面積)	薪炭の生産量
			生物種数・多様性			
			種の個体数・分布域			
			生息環境			
		人工林	面積・量	森林面積(人工林) 森林蓄積(人工林) 樹木の地上部現存量(人工林) 森林施業面積	森林生態系面積(人工林の面積) 「森林施業面積」以外はC指標にランクダウン	森林面積(人工林) 森林蓄積(人工林) 森林生態系面積(人工林の面積) 樹木の地上部現存量(人工林) 針葉樹・広葉樹別国内素材生産量
			生物種数・多様性			
			種の個体数・分布域			
			生息環境			

国家戦略の目標要素	指標区分			A指標	B指標	C指標
	大区分	小区分	細区分			
全体として生態系の規模が増加し質が向上することで健全性が回復している	農地	全体	面積・量	耕作放棄地面積 農地(耕地)から宅地工場用地などへの転用面積(人為かい廃面積) 農業地域類型別耕地面積 有機JASほ場面積	農地生態系面積	耕作放棄地面積 農地生態系面積 耕地面積 農業地域類型別耕地面積 農地(耕地)から宅地工場用地などへの転用面積(人為かい廃面積)
			生物種数・多様性			
			種の個体数・分布域			
			生息環境			
		水田	面積・量	農業地域類型別耕地面積(田) 有機JASほ場面積	農地生態系面積(水田) 放棄水田の面積 水田整備面積及び水田整備率	放棄水田の面積 水田整備面積及び水田整備率 農地生態系面積(水田) 農業地域類型別耕地面積(田)
			生物種数・多様性			
			種の個体数・分布域			
			生息環境			
		畑・果樹地・牧草地	面積・量	農業地域類型別耕地面積(畑、果樹地) 有機JASほ場面積	農地生態系面積(畑) 放棄果樹園の面積 放棄畑地の面積	農地生態系面積(畑) 放棄果樹園の面積 放棄畑地の面積 農業地域類型別耕地面積(畑、果樹地)
			生物種数・多様性			
			種の個体数・分布域			
			生息環境			
		二次草原・草地	面積・量	森林以外の草生地(野草地)の面積	二次草原の面積	
			生物種数・多様性			
			種の個体数・分布域			農地生態系を構成する種の生息状況(カヤネズミの生息面積)
			生息環境			

状態目標3-3からの再掲により追加

面積・量の指標はC指標にランクダウン

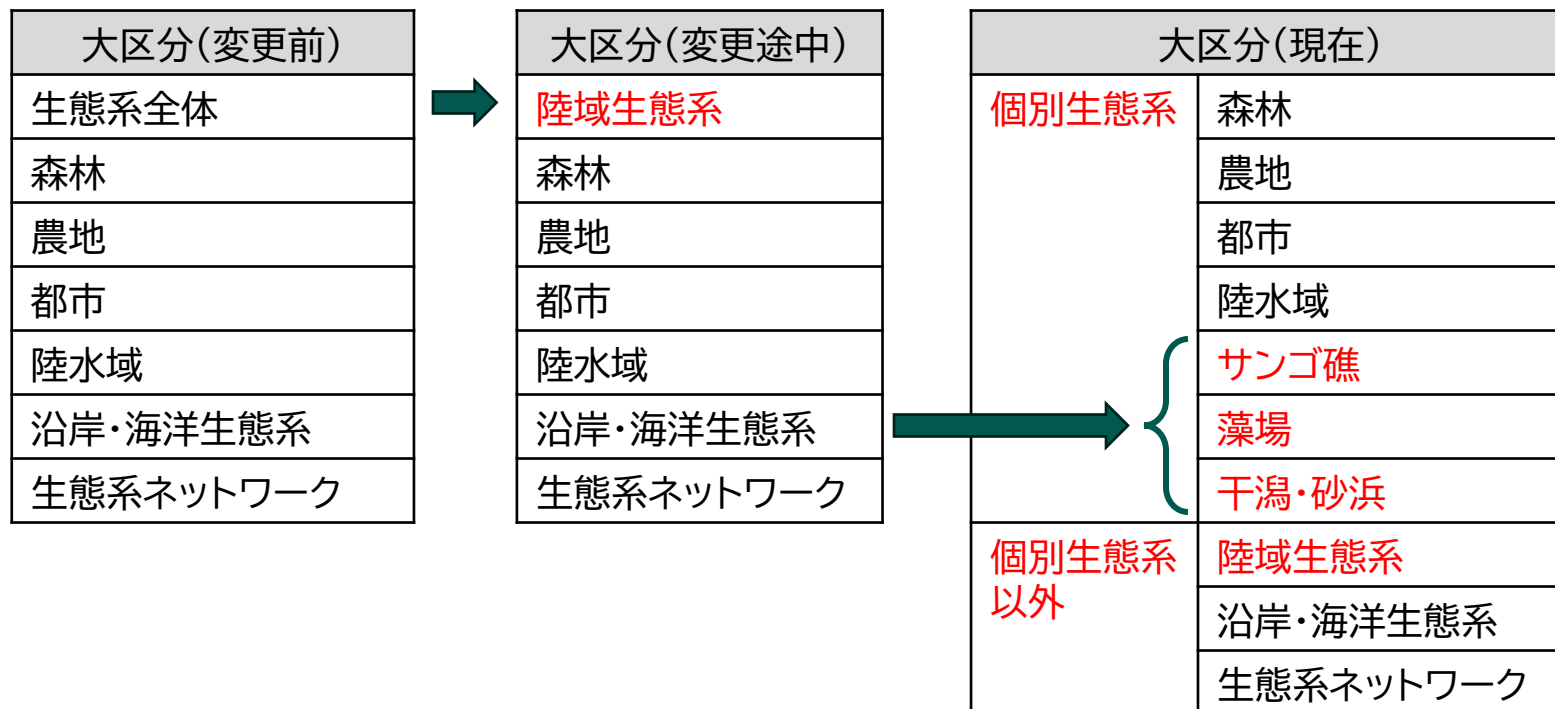
面積・量の指標はC指標にランクダウン

面積・量の指標はC指標にランクダウン

国家戦略の目標要素	指標区分			A指標	B指標	C指標
	大区分	小区分	細区分			
全体として生態系の規模が増加し質が向上することで健全性が回復している	農地	里地里山	面積・量	農地生態系を構成する種の生息状況(里地の在来植物の種数) 農地生態系を構成する種の生息状況(里地の在来哺乳類の種数) 農地生態系を構成する種の生息状況(里地里山を主な生息地とするチョウ類の種数) 農地生態系を構成する種の生息状況(里地の在来鳥類の種数)	里地里山メッシュ	竹林の面積
			生物種数・多様性			
			種の個体数・分布域			
			生息環境			
			面積・量			
	都市	創出緑地	面積・量	都市公園の面積	三大都市圏の土地利用 全国の町丁目別緑被率 都市(市街化区域)における緑地面積	アカガエル3種の初産卵日 都市(市街化区域)における緑地面積 三大都市圏の土地利用 都市公園の面積 全国の町丁目別緑被率
			生物種数・多様性			
			種の個体数・分布域			
			生息環境			
			面積・量			

面積・量の指標はC指標にランクダウン

（参考③）生態系区分の変更

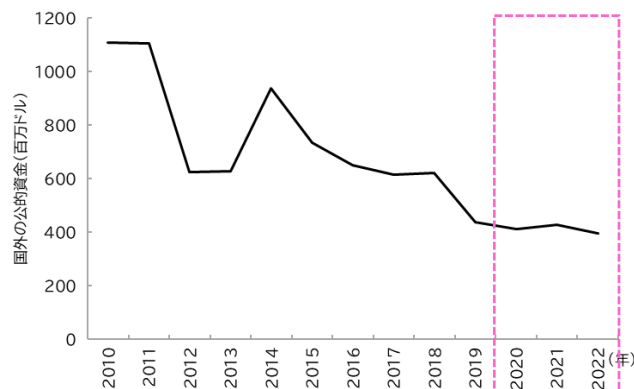


(参考④) 公的資金・民間資金の指標のスミージング対応

公的資金

A: 生物多様性および生態系の保全と持続可能な利用に関する国外の公的資金

元グラフ



増減傾向のまとめ

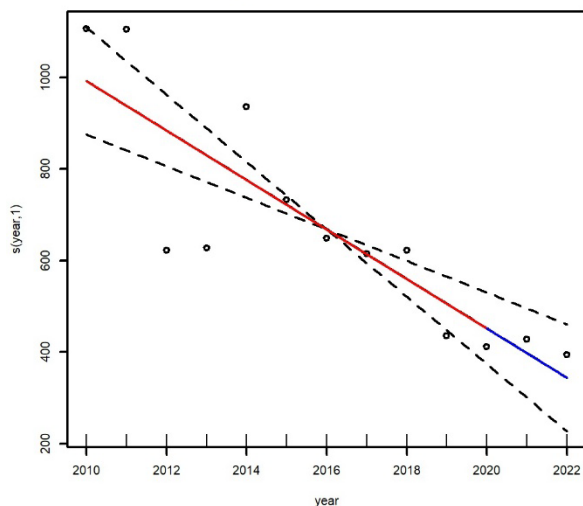
- 評価手法・自由度の設定によって増減傾向が異なる。

⇒維持傾向 とした。

方法	結果		評価
事務局の感触			
①スミージングしたデータを用いて、基準年(2020年)に対する対象年(2022年)の変化率(=グラフの傾き)について、2010年から2020年までの変化率と比較した差分で評価	自由度1	0.0	→
	自由度3	-4.6	↘
	自由度2	20.2	↗
②スミージングしたデータを用いて、基準年(2020年)に対する対象年(2022年)の変化率で評価	自由度1	-54.0	↘
	自由度3	-63.8	↘
	自由度2	-37.2	↘
③スミージングしたデータを用いて、基準年(2020年)に対する対象年(2022年)の変化率について、データの最も古い年から2020年までの変化率と比較した差分で評価	自由度1	①と同様	↘
	自由度3	①と同様	↘
	自由度2	①と同様	↘

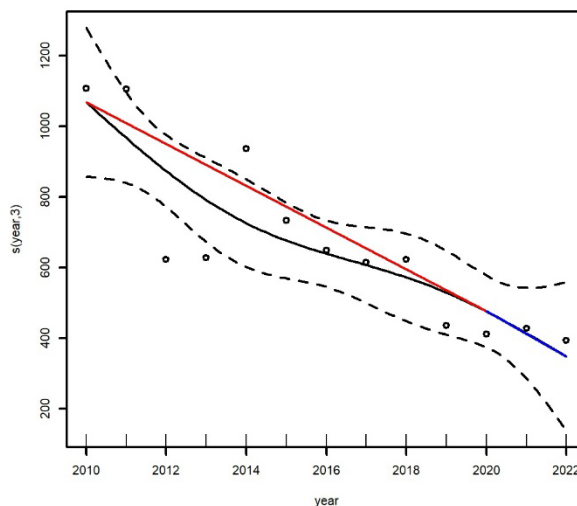
- ①スプライン化したデータを用いて、基準年(2020年)に対する対象年(2022年)の変化率(＝グラフの傾き)について、2010年から2020年までの変化率と比較した差分で評価
- ②スプライン化したデータを用いて、基準年(2020年)に対する対象年(2022年)の変化率で評価
- ③スプライン化したデータを用いて、基準年(2020年)に対する対象年(2022年)の変化率について、データの最も古い年から2020年までの変化率と比較した差分で評価
(本指標では最も古い年が2010年だったため、①と③は同じ結果)

平滑化スプラインの結果



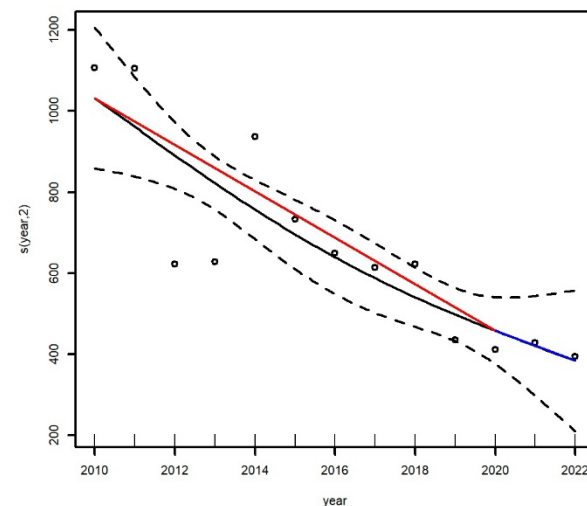
自由度1
(デフォルト)

平滑化スプラインの結果



自由度3
(データ数/3-1)

平滑化スプラインの結果



自由度2
(データ数/10 - 1)

方法:スプライン線上の以下の年の値を直線で結んだ。

赤線:2010～2020年

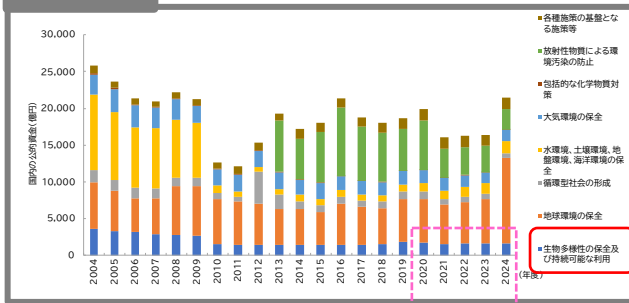
青線:2020～2022年

	② 2010~2020	2020~	①、③ 差分
自由度1傾き	-54.0	-54.0	0.0
自由度3傾き	-59.2	-63.8	-4.6
自由度2傾き	-57.4	-37.2	20.2

公的資金

A:生物多様性および生態系の保全と持続可能な利用に関する国内の公的資金

元グラフ



増減傾向のまとめ

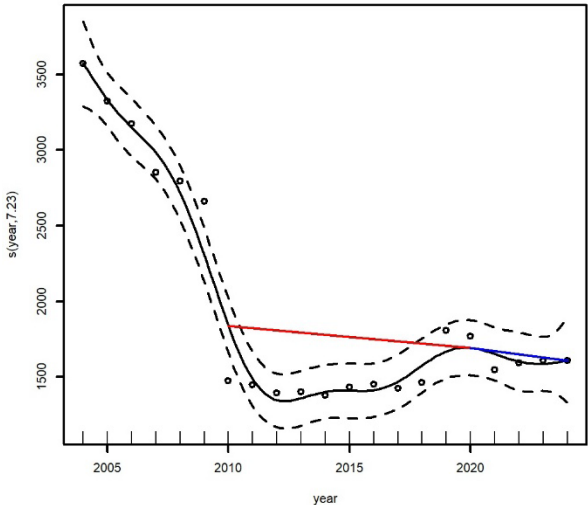
- 評価手法・自由度の設定によって増減傾向が異なるが、概ね増加傾向。

⇒増加傾向 とした。

方法	結果		評価
事務局の感触			→
①スミージングしたデータを用いて、基準年(2020年)に対する対象年(2024年)の変化率(=グラフの傾き)について、2010年から2020年までの変化率と比較した差分で評価	自由度7.23	-6.7	↓
	自由度6	0.2	↑
	自由度2	158.3	↑
②スミージングしたデータを用いて、基準年(2020年)に対する対象年(2024年)の変化率で評価	自由度7.23	-21.1	↓
	自由度6	-20.3	↓
	自由度2	100.4	↑
③スミージングしたデータを用いて、基準年(2020年)に対する対象年(2024年)の変化率について、データの最も古い年から2020年までの変化率と比較した差分で評価	自由度7.23	96.3	↑
	自由度6	94.4	↑
	自由度2	234.8	↑

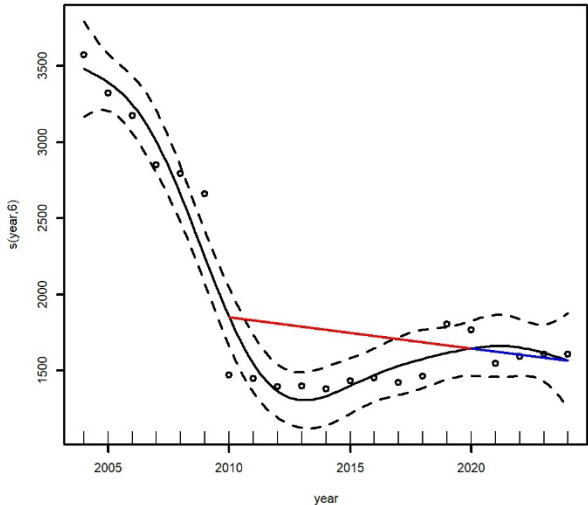
- ①スムージングしたデータを用いて、基準年(2020年)に対する対象年(2024年)の変化率(＝グラフの傾き)について、2010年から2020年までの変化率と比較した差分で評価
- ②スムージングしたデータを用いて、基準年(2020年)に対する対象年(2024年)の変化率で評価

平滑化スプラインの結果



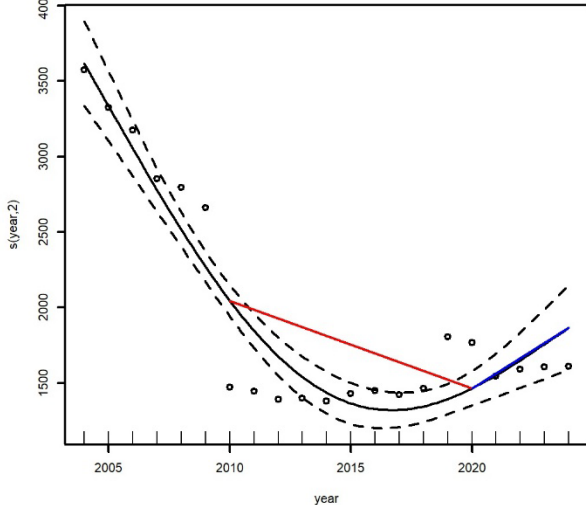
自由度7.23
(デフォルト)

平滑化スプラインの結果



自由度6
(データ数/3-1)

平滑化スプラインの結果



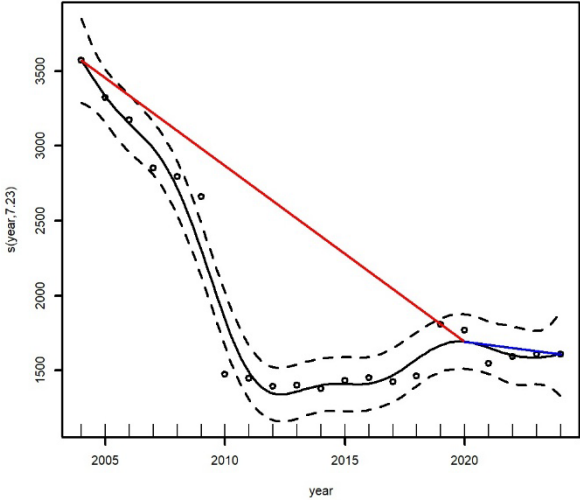
自由度2
(データ数/10 -1)

方法:スムージング線上の以下の年の値を直線で結んだ。
赤線:2010～2020年
青線:2020～2024年

	② 2010~2020	2020~	① 差分
自由度7.23傾き	-14.4	-21.1	-6.7
自由度6傾き	-20.5	-20.3	0.2
自由度2傾き	-58.0	100.4	158.3

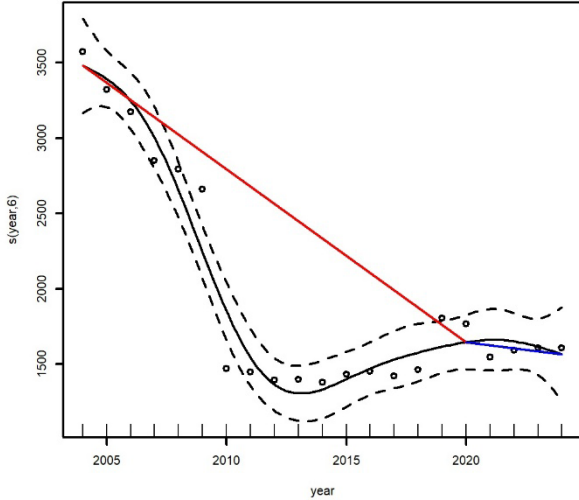
③スムージングしたデータを用いて、基準年(2020年)に対する対象年(2024年)の変化率について、データの最も古い年から2020年までの変化率と比較した差分で評価

平滑化スプラインの結果



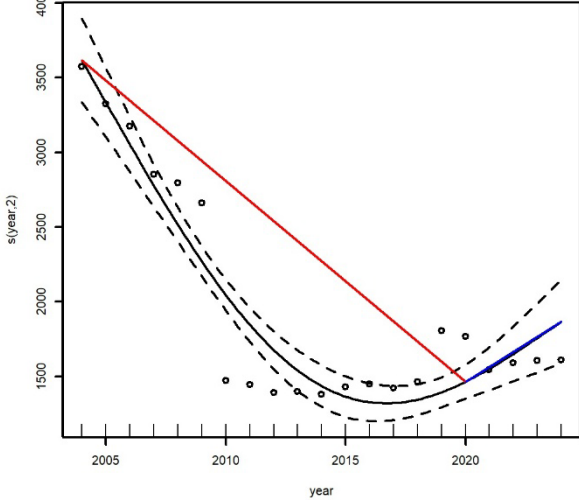
自由度7.23
(デフォルト)

平滑化スプラインの結果



自由度6
(データ数/3-1)

平滑化スプラインの結果



自由度2
(データ数/10 -1)

方法:スムージング線上の以下の年の値を直線で結んだ。

赤線:2004~2020年

青線:2020~2024年

		②	③
	2004~2020	2020~	差分
自由度7.23傾き	-117.4	-21.1	96.3
自由度6傾き	-114.7	-20.3	94.4
自由度2傾き	-134.4	100.4	234.8